

直観知と共通概念

—スピノザの哲学における真理論の展開—

柴 田 健 志

はじめに

これまでのスピノザ解釈では、「直観知」は人間精神において生じる認識として論じられてきた。それは間違いではない。しかし本来は「直観知」は神の認識である。それゆえ、人間精神にとっての「直観知」は人間精神が神の思考に一致することによって成立するのである。だからこそ、それは「最高の徳」(G/25P)と呼ばれる。意外にも、この点はスピノザ研究者たちから見過ごされてきた。しかし、「直観知」はなによりもまず神の思考として理解すべきである。そうしなければ、「直観知」という思想にいったいどんな問題が含まれているかを理解することは難しいはずである。その問題とは、人間精神と神の思考とのあいだに巨大な隔たりがあるという点である。「神の本質を構成する知性および意志とわれわれの知性および意志とは天と地ほど異なっていなければならぬ」(I/17/S)とスピノザ自身が述べているほどである。この点を鮮明に認識するならば、人間精神が神の思考に一致するという主張がいかに難しい問題を含んでいるかはすでに明瞭であろう。「直観知」を語ることで、スピノザは一見して不可能と思われるようなことを主張しているのでは

る。そこで、人間精神がいかにして神の思考に同化しうるのかという問いかけを出発点にして、スピノザの真理論を検討してみなければならぬ。この考察は『知性改善論』から『エチカ』への真理論の展開を再構築するという手法によって進められる。

1 推論

上記の問題は、スピノザの哲学において「推論」とはいったい何かという主題に結びつく。「直観」という至高の認識に対比されたとき、「推論」はいかにも平凡で人間的である。事実、スピノザも『知性改善論』では真理の認識から「推論」を除外している。しかし、『エチカ』において「推論」は「共通概念」による認識に生まれ変わり、真理の認識に分類されている。『エチカ』における「推論」は人間精神と神の思考とのあいだにある「天と地ほど」の隔たりを埋め、人間精神が神の思考に参入するための通路を開く役割を荷なわされているのである。では、『エチカ』における「推論」つまり「共通概念」による認識は、いったいどうしてこのような役割を果たしうるのであろうか。以下の論考をとおして最終的に説明されなければならないのはこの点である。

ストーリーの概略は次のようなものである。神が「直観」によって認識しているという主張は『知性改善論』に明確に認められる。この主張の背景には、真理の認識とはすでに存在するものを認識することではなく、むしろそれまで存在しなかったものを認識することであるという思想があるように思われる。このような認識のみが真理の認識とみなされ

ている。

それまで存在しなかったものは、このテキストでは「未知」のものと呼ばれている。この点を前提すれば、なぜ真理の認識が「直観」によらなければならないかという問いかけに対し次のように答えることができる。ポイントは、「直観」によつて退けられているのが「感覚経験」および「推論」という認識の形態であるということにある。「感覚経験」による認識は認識すべきものがすでに存在していることを前提しており、その意味で真理たる資格をもたない。この点は明白であろう。ところが「推論」もまた真理の認識方法としては不資格なのである。「推論」とは規則にしたがつて前提から帰結を導くことである。それゆえ、前提が与えられればそこから何が帰結するかは予測可能である。ところが、予測可能であるということはものが現実存在する前に認識できるということである。すると、それは「未知」のものではないことになる。本当に「未知」のものは、まさにそれが認識された時点で現実に存在しはじめるようなものでなければならないからである。そのような仕方では認識するには「直観」によるほかない。それが神の認識である。これに對して、人間精神に認識しうるのにはすでに存在しているものでしかない。すると、なぜ人間精神に「直観知」が与えられるかはひとつの謎になる。この謎は『知性改善論』では説明されていない。それを説明したのが『エチカ』である。

この展開を可能にした要素はいくつか考えられる。しかし最も重要なのは「共通概念」による認識が『エチカ』に導入されたことである。『知性改善論』は「推論」を真理の認識とは認めず、ただ「直観知」のみを真理の認識であるとしたにとどまり、人間精神がいかにして神の思考に

参入するのかという点がいつさい触れられなかった。スピノザの真理論の展開にとつて「共通概念」が重要であると考えられるのは、「共通概念」によつてまさにこの点が示されたからである。

では、「共通概念」による認識とは何か。この問いかけに対する解釈は論文の最後の部分で論じられる。ただ、そこで展開される解釈の要点には、ここであらかじめ言及しておくべきであろう。私の解釈によれば、「共通概念」による認識とは『エチカ』における定理の証明そのものである。ということは、『エチカ』という著作を理解することそれ自体によつて、人間精神は神の思考に接近するということになる。この解釈を納得のいくものとして提案するためには、このように解釈すべき根拠を『知性改善論』から『エチカ』への真理論の展開に求めなければならないのである。

2 『知性改善論』

『知性改善論』におけるスピノザの知識論は次の二点を前提している。

(1) 真理の認識は現実に存在する対象とは独立に知性の能力によつて与えられる。

(2) 真理の認識は現実に存在する対象に一致する。

この二点は両立しえないものであるように見える。確かに、一見するとこれらは矛盾している。しかし、この二点がデカルトによつてもた

らされた知識論の新パラダイムであるということは哲学史上の事実である。デカルトは、アリストテレスの経験主義にもとづく旧パラダイムを批判し、「感覚経験」による認識は不確実なものであるがゆえに、むしろそれを否定することが正しく、その上で知性に提示される観念を考察するという手段に訴えた。そして、「明晰・判明」な観念が現実に存在する対象に一致するということは、すべてのものの原因である神によって保証できると主張したのである (Descartes 1966a, 17-26)。このようなパラダイム・チェンジをスピノザは踏襲している。

(1) の論点は「真の観念はその対象とは異なる」(§33)と表現されている。また(2) の論点は「観念はその形相的本質に完全に一致しなければならぬ」(§42)と表現されている。これらをまとめると、人間精神は現実に存在する対象に依存せずに思考するによってのみ、現実に存在する対象を真に認識することができるということになる。なぜそのようなと考えられるかという点はこの『エチカ』によって証明されることになる。

さしあたりの問題は、現実に存在する対象からでなければ人間精神はいったいどこから真理の認識(スピノザの用語では「真の観念」)以下、スピノザの用語で統一する)をえているのかという点である。言い換えれば、「真の観念」はどうやって生み出されているのかという点である。スピノザによれば、「真の観念」の源泉は人間精神ではない。むしろ、「観念はその形相的本質に一致しなければならない」という前提から次のことが明らかであるという。

「われわれの精神が自然のすがたを完全に再現するためには、すべての

その観念を、自然全体の根源および源泉を再現する観念から、この観念それ自身がまた他の諸観念の源泉となるような仕方を取り出さなければならぬこと(§42)。(§42)。

人間精神が持ちうる「真の観念」は、すべての観念がそこから出てくるところの「根源」ないし「源泉」から出てくるということが肯定されている。この「根源」ないし「源泉」は、『エチカ』では「神の観念」という概念に集約されるものである。『知性改善論』では「最も完全な存在者の観念」(§49)という言葉がこれに対応するであろう。すなわち、スピノザはあらゆる真理が「神の観念」から演繹されるといっているのである。

では、すべての観念が「神の観念」から演繹されるということは、逆にすべての観念が「神の観念」に還元されるということの意味するのであるか。「神の観念」のなかにはあらかじめすべてが含まれていて、それが展開されているだけなのであるか。そうではない。なぜなら『知性改善論』が真理の認識について論じる際に問題になっているのは「未知の事物」(§29, §25)だからである。「神の観念」のなかにはあらかじめすべてが含まれているのであれば、そこから出てくるものは「未知の事物」ではない。神はそれが現実に存在するであろうことを予測できたのだから。すると、スピノザの知識論は一見すると両立しないように思われる二つの主張によって成り立っていることになる。

(イ) 真理は「神の観念」から演繹される。

(ロ) 真理は「神の観念」に還元できない。

では、これら二つの主張を両立させるには、いったいどのように考えればよいのであろうか。「神の観念」からの演繹を創造的な過程として考えればよい。そうすれば、すべてが神から出てくるにもかかわらず、いったん出てきたものを神に還元することははやできないという論理が成立するのであろう。実際、『知性改善論』には次のような考えが述べられている。

「ある人々が、事物を創造する前の神の知性を考えるのと同じように、知性がこれまで存在しなかった何らかの新しい存在を知覚したということ、もしわれわれが想定するならば（そのような知覚は確かにどのような対象からも生じえなかった）、またそのような知覚から他の諸知覚を正しく導くと想定するならば、このような思惟はすべて真であり、またいかなる外的対象によっても決定されておらず、むしろただ知性の能力と本性にのみ依存していることになる」（871）。

驚くべき思想が表明されているテキストである。人間精神が「これまで知らなかった存在を知覚」というのではない。「これまで存在しなかった存在を知覚」というのである。（なお、スピノザの用語法では、「知覚」とは現実に存在する対象の認知を意味するのではなく、むしろ観念の認知ということを意味している）。神がまさにそのようにものを認識するならば、人間精神も同じようにものを認識しようと「想定」してみようというのである。

『知性改善論』においてはまだ「想定」であることを『エチカ』の形

而上学は証明しようとしている。すなわち、神の知性はまだ存在しなかったものをつねに思考している（すなわち思考することが存在を生み出すことになっている）が、人間精神が神の知性の一部分であるとすれば、人間精神にも「これまで存在しなかった存在を知覚」することができるといふ思想である。神においては認識が存在を作り出すのであるから、認識とその対象は必然的に一致し、したがって認識はつねに真である。人間精神の認識もこの思考に一致するかぎり真である。

では、「これまで存在しなかったもの」を認識するということは、いったいどういう認識なのであろうか。いうまでもなくそれが「直観」による認識である（1）。『知性改善論』のテキストによれば「何の操作もせず、直観によって見る」（824）ことである。「これまで存在しなかったもの」は既知の情報によつては理解できないものである。それゆえスピノザは三段論法を真理の認識から排除している（821）。それはかりでなく、およそいかなる「推論」をも排除しているのである（819）。なぜなら、推論をおこなうには推論の規則が前提されるが、規則を適用するということはそこから何が出てくるかを現実にも存在する以前に予測しようということの意味するからである。それでは本当に「未知」のものを認識したことにはならないということなのである。

神は「これまで存在しなかったもの」を次々に認識していく。その思考は前提から帰結へと進む諸観念の複雑な連鎖を作り出している。人間精神がこの連鎖に参入し、前提から帰結への思考をたどることができれば、真理の認識が成立するのであろう。スピノザはこれを「十全」な認識と呼ぶ。この論理を読み流すなら、スピノザの真理論の問題点を見逃すであろう。というのも、ここで展開されているのは、人間精神という

「有限知性」が神の思考である「無限知性」に参入するという法外な論理なのだから。有限／無限のあいだの巨大な隔たりを強調する伝統的な形而上学からの逸脱がここにはつきりと認められなければならない。知識論においては新しいパラダイムを創設したデカルトでさえ、存在論においてはこの伝統に則って哲学を構築していたのである。この点にスピノザ哲学の異例性があるということを、ジャン＝リュック・マリオンはきわめて的確に指摘している。「デカルトとは対照的に、(・・・)有限知性が事物の十全な認識に到達するには自らを無限知性に適合させなければならぬというふう」にスピノザは考えを進めていったのである」(Marion 1994, 138)。「『エチカ』が理性によって達成しようとしているものはまさしくデカルトが人間理性には接近することができないと信じたものと同じものである」(Marion 1994, 149)。

ところで、スピノザの考えをひとこととまとめれば、「直観知」のみが真理の認識として認定されるということになる。しかし、ということとは、もし神の思考に参入することができない場合、人間精神の認識はすべて偽である。これが「不十全」な認識と呼ばれるものである。

「もし真のすなわち十全な思考を形成することが、一見して明らかかなように、思考する存在者の本性に由来するのであるとすれば、不十全な観念とは、われわれが何らかの思考する存在者の一部分であり、その存在の思考のあるものは全体的にまたあるものはただ部分的にのみわれわれの精神を構成しているというただそのことによって、われわれのなかに生み出されるということは確かである」(873)。

「思考する存在者」はつねに「十全」に思考している。では「思考する存在者の一部分」であるにすぎない人間精神においてはそうならないはなぜか。人間精神がまさに「思考する存在者の一部分」でしかないからである。人間精神においては「思考する存在者」の「十全」な思考がそのまま保存されず「あるものは全体的にまたあるものはただ部分的にのみ」つまり「欠損」(873)をともなつて現れてくるからである。では、人間精神はこの条件をいったいどうやって乗り越え、「欠損」なしに思考しうるのであろうか。「知性改善論」はこの問いかけに答えていない。したがって、この点は「エチカ」が解決すべき課題となる。

以上の考察を踏まえ、次に「エチカ」のテキストを考察しなければならぬ。そのために、『知性改善論』について指摘した論点をここでもういちど整理しておく。

(イ) 真理は「思考する存在者」から出てくる。

(ロ) 真理は未知のものである。

これらの論点はすでに「神の観念」という『エチカ』の用語法によって言及したものと同一である。すでに指摘したとおり、(イ)(ロ)を総合すると神の思考の創造性という解釈上の視点がえられる。この思想はそのまま『エチカ』に継承されている。まずこの点を『エチカ』のテキストによって再構成しなければならない。それを踏まえた上で、上記の問いかけに対する『エチカ』の解答がどのようなものであるかという点の考察に移ろう。

3 『エチカ』

神の思考の創造性を主題に『エチカ』を読解する出発点として次のテキストに注目しなければならない。

「神の本性の必然性から無限に多くの仕方で無限に多くのものが（すなわち無限知性の下に生じうる(cadere possunt)すべてのものが）帰結しなければならぬ」(1/16/P)。

「無限に多くのもの」が神から出てくると述べるこの定理において重要な点は、「無限に多くのもの」とは「無限知性の下に生じうるすべてのもの」のことであると説明されている点である。この説明によって「無限に多くのもの」が神の思考によって生み出されているという点^が示されていると考えられるのである。ただし、神の思考がどのようなものであるかは『エチカ』第一部では主題的に取り扱われていない。この点が主題になるのは『エチカ』第二部においてである。というのは、思考なしし思惟が「神の属性」であることは『エチカ』第二部になつてはじめて証明されることだからである。「思惟は神の属性である。すなわち神は思惟するものである」(2/1/P)。にもかかわらず、『エチカ』第一部でスピノザは平然と「知性」に言及している。これは論点先取であるように見える。しかし、『知性改善論』において主張されていたように、存在の原因は思考にほかならないとすれば、知性に言及することなしに存在論を構築することはできない。この点を踏まえれば、「知性」の原

理によって一般的に構築された『エチカ』第一部の存在論を、「思惟」および「延長」という二つの属性において具体的にとらえ直した上で知識論へと展開するのが『エチカ』第二部であると解釈できる。この解釈によれば、『エチカ』第一部における神の知性に関する内容は、『エチカ』第二部の用語で述べ直すことができる。

『エチカ』第二部の用語法では「思惟」の「様態」が「観念」である。そこで、「無限に多くのもの」が神の思考によって生み出されるという上記の主張は、『エチカ』第二部になると「観念」という用語によって具体的にとらえられる。

「神のなかには、神の本質の観念および神の本質から必然的に帰結するすべてのものの観念が、必然的に与えられる」(2/3/P)。

このように、神の「本質」つまり「本性」（これらはスピノザの用語法では同義）からものが「帰結する」という、『エチカ』第一部定理16と同じ主張が、「観念」という用語を導入してくり返されている。さらに次の定理では、「神の観念」から「すべてのものの観念」が「帰結する」という関係が明示化されている。

「無限に多くのものが無限に多くの仕方でそこから帰結するところの神の観念は、唯一でしかありえない」(2/4/P)。

「神の本質の観念」が「神の観念」という短い表現に置き換えられ、また「無限に多くのもの」という『エチカ』第一部定理16のフレーズが

再使用されていることから、これら三つの定理 (L16/P. 2/3/P. 2/4/P) が同じ主題を取り扱っているという点が明瞭に理解しうる。そこで、これらの定理に共通して使用されている「帰結する (sequi)」という用語に注目しなければならない。「帰結する」という用語で表現されるのはいったいどのような関係なのであろうか。この点を説明するにあたって、スピノザは数学を例に出す。

「神の至高の力あるいはその無限の本性から、無限に多くのものが無限に多くの仕方、言い換えればあらゆるものが、必然的に流出したことがあるいはつねに同一の必然性によって帰結すること、またそれは三角形の本性からその三つの角が二直角に等しいことが永遠から永遠に帰結するのと同じ仕方においてであること、これらのことを私は十分明瞭に示したと思う」(L17/S)。

数学において「三角形の本性からその三つの角が二直角に等しいことが帰結する」と同じように、神から「無限に多くのものが帰結する」のであるという。これをもとに「帰結する」という用語の意味を考えてみなければならない。一見して明らかな点は、「三角形」を思考しなくては「内角の和が二直角に等しい」ということは思考できないという点である。しかしこのことは、「三角形」の概念に「内角の和が二直角に等しい」という性質がはじめから含まれているということの意味しない。というのは、「内角の和が二直角に等しい」ということを認識するには、ユークリッドの『原論』第一部定理3.2証明で示されているように、補助線を書き加えた上で三角形の三つの角を直線上に移しかえる操作が必要だ

からである。カントが的確に述べたように (Kant 1990, 660: B744)、「内角の和が二直角に等しい」ということはたしかに「三角形」の性質だが、「三角形」の概念を分析しているだけでは決して出てこないものなのである。このことは、「内角の和が二直角に等しい」という性質が「三角形」の概念にはあらかじめ含まれていないということを示している。むしろ、「三角形の内角の和が二直角に等しい」という認識によって、「三角形」に関する知識が拡張されたと考えなければならないのである。

ただし、この例には注意が必要である。というのは、証明とは「推論」であるが、「推論」は「未知の事物」を認識する神の思考には相応しくないものだからである。そこで次のように考えてみるができる。前提に論理的な規則を適用することによって、たんに形式的に導かれた帰結は確かに「未知の事物」とはいえない。しかし、ここで問題になってるのは作図による認識である。作図は規則の形式的な適用ではない。むしろ、証明の対象となっている図形に即して発想されなければならないものである。ということは、この証明の一連の操作をすべて「直観」によって進むものとして理解するという視点が成立しうるであろう。

多少論点を迂回するが、この点について哲学的な考察をつけ加えておく必要がある。スピノザの「直観」の概念は、デカルトが『精神指導の規則』で提示した「直観」の概念を踏襲しているという仮定が成立しうるからである。デカルトが『精神指導の規則』の草稿を書き上げたのは1628年。遺稿がオランダ語に訳されたのは1684年である。またラテン語版の出版は1701年になる。これだけを見ると、1676年に亡くなったスピノザがデカルトのこの著作を読む機会はない。しかし、『精神指導の規則』の写本は当時すでにオランダにあった。また

オランダ語訳者のグラーツェマーケルはスピノザの著作のオランダ語訳者でもあり、実際にスピノザと交流があった (Meisina 1983, 514)。以上のような事情を考慮すると、スピノザがこの著作を読んだか、あるいはその内容について知っていたと仮定することは十分可能である (Sanchez Estop 1987, 58)。スピノザにとって、神の思考は前提から帰結へと進む演繹的なものだが、演繹のひとつひとつのステップは推論ではなく「直観」によるものであると考えられる。このアイデアがデカルトに由来していると仮定すれば次のような説明が成り立つ。

デカルトにとって、「直観」は「推論」ないし「演繹」に対立するものではなく、むしろそれらにとって不可欠のものとしてされている。

「直観のこのような明証性と確実性は、たんに命題にとってだけでなく、さらにまたどのような推論 (discursus) にとっても要求される」 (Descartes 1996b, 369)。

すなわち、「推論」ないし「演繹」を構成するひとつひとつのステップが「直観」によるものであるということが、「推論」ないし「演繹」の確実性を保証すると考えられるのである。この意味において「直観と演繹のあいだに本性の差異は存在しない」 (Brunschvicg 1993, 141) と同じことになる。ロックもまたこの考えに従っている。ロックによれば、観念の連鎖からなる「論証的 (demonstrative)」な認識においても「直観なしには真理と確実性に到達することはできない」 (Locke 1975, 531)。デカルトもロックも人間知性がおこなう認識について述べているのだが、スピノザは神の思考においてはつねにこうした認識が成立すると考えた。

この点にスピノザ固有の発想がある。

それでは以上の迂回を経て、「帰結する」という用語の解釈をまとめてみよう。「三角形」がなければ出てこないが、だからといって「三角形」のなかにあらかじめ存在したのではないものが出てくること、しかも「三角形」の概念の外にはなくまさしく「三角形」の概念のうちに発現すること、これが「帰結する」という用語の意味である。また、神の思考が「前提」から「帰結」への演繹であることは、神の思考が「直観」によって進むという点に何ら矛盾しないと考えられるのである。

では、この意味を「神の観念」に当てはめると、いったいどうなるのであるうか。「神の観念」がなければ出てこないが、だからといって「神の観念」のなかにあらかじめ存在したのではないものが、まさしく「神の観念」そのもののうちに「無限に多くの仕方」出てくること、これが神の思考であるということになる。スピノザはこれを「神の属性の変容 (affectio)」 (I/30/P) という概念に集約している。『知性改善論』の言葉を使えば、神のうちに発現するものは神にとってさえ「未知の事物」であるということなのである。『エチカ』のいう「無限に多くのもの」とはすべてそのような「未知の事物」であることになる。この意味において神の思考はつねに「直観」によって進む創造的なものであるといえるのである。

4 『知性改善論』から『エチカ』への展開

以上は『エチカ』のテキストによって再構成された神の思考である。

では、人間精神の思考はいったいどうなるのであろうか。「存在するものはすべて神のなかに存在する」(115/P)というスピノザの内在性の哲学において、人間精神とは神の思考によってもたらされる「無限に多くのもの」のひとつである。ということは、人間精神は神にとつてさへ未知の事物」として認識されているということになる。では、人間精神という「未知の事物」は、人間精神自身にとつてはいいいかなるものなのであろうか。

人間精神は神の思考の一部分である。いや、一部分でしかないがゆえに人間精神の認識には「欠損」が生じる。このような考えが『エチカ』では体系的に述べられている。すでに言及した「十全」「不十全」という用語も、『知性改善論』で素描された思想を立体的に表現するものとなっている。重要な点は、「不十全」な観念が生じる構造を説明する理論的な道具立てとして、『エチカ』において「身体の変容」という論理が導入されたという点である。『知性改善論』のいう「欠損」はこの論理によって語り直される。

人間身体が外部の物体によって刺激されることによって、人間身体には「変容(affectio)」(213/D)が生じる。これが「身体の変容」である。いわゆる「感覚経験」がこう呼ばれているのである。また、人間精神のなかには「身体の変容」についての認識がある。それは「身体の変容の観念」(219/P)と呼ばれる。「感覚経験」による認識のことである。

ところで、人間精神がこの観念をとおして「外部の物体」(226/P)および「人間身体」(227/P)さらには「人間精神」(229/P)を認識する限り、それらのどれひとつとして「十全」に認識することができない。つまり、「身体の変容の観念」は神の思考に一致しないのである。したがっ

て、それらはすべて「虚偽」(235/P)である。

では、いったいどうして「身体の変容の観念」にもとづく認識は「十全」ではありえないというのであろうか。この認識が思考それ自体の内的な展開になっておらず、むしろ思考に対して外的な作用の結果に思考が追従しているだけだからである。つまり人間精神が「内部から決定され」(229/S)ておらず、まったく反対に「外部から決定され」(229/S)てしまっているからである。前提から帰結への演繹が重要なのは、それが「これまで存在しなかったもの」を思考することだからである。これが存在についての真の思考であるとすれば、すでに存在しているものの相互作用の結果に追従することは、真の思考からの逸脱である。それが思考の「欠損」にほかならない。スピノザにおいて「感覚経験」による認識が真理の認識から除外される理由はここにある。

しかし、そうであるとすれば、人間精神の認識はほとんどの場合に「十全」なものとはいえないであろう。人間はものを認識する際に「感覚経験」に頼っているからである。これに対し、ものを認識するという作用が同時にものを存在に決定することであるような場合にのみ、人間精神の認識は「十全」なものとして認められるのである。しかし、そのようなことが本当にありうるのであろうか。つまり、「これまで存在しなかったもの」が存在に決定されることそれ自体を思考するというようなことが、人間精神に起こりうるのであろうか。起こりうるならば、人間精神が神の思考に一致するかぎりにおいてのみである。そこで問わなければならないのは、人間精神が神の思考に参入しそれと一致するという論理がどうやって成立するのかである。『知性改善論』においては掘り下げられなかったこの問いかけに『エチカ』は答えなければならない。

ところが、『エチカ』にはこの問いかけにたいする明示的な解答は見出されない。そのかわり、人間精神にとって「直観知」は可能であるという論理が提示されているだけである。しかし、この論理をいくらかどつても、いかにしてその認識にたどり着くことができるのかという根本的な疑問は解消されない。たしかに、スピノザは人間精神が「直観知」に到達する条件を説明していない。しかし、私の解釈によれば、スピノザは説明とは別の方法でこの条件を読者に伝達している。では「別の方法」とは何か。『エチカ』を構成する定理の証明である。つまり『エチカ』

を理解することによって「直観知」への通路が開かれるのである。そうであるとすれば、「直観知」に関する明示的な説明が以下のような形式的な議論に終止していることは何ら問題ではない。『エチカ』第五部までをすでに理解した読者にとつては、「直観知」のたんなる可能性が論理的に示されれば十分なのだ。この視点から『エチカ』第五部のテキストを再構築しておかねばならない。

人間身体に「変容」が生じるということは、人間身体がすでに存在し持続しているということを意味している。このことは、人間精神があらゆる対象をすでに存在するものとして認識する前提となっている。この点にまず注目しなければならない。

「人間精神は身体の持続がなければ何も表象することができず、また過去の事物について何も想起することができない」(5/21P)。

「身体の持続」つまり身体がすでに存在していることを前提する限りで、人間精神はあらゆるものをすでに存在しているものとして認識すること

ができる。そのような認識が「表象 (imagination)」である。これは「十全」な認識である。すでに存在したものを「想起」することもやはり「十全」な認識に入る。なぜなら「想起」とはかつて生じた「身体の変容」の「痕跡」(2/28D) が再活性化されることで成立すると考えられるからである。これに対し、身体がまさに存在に決定されることの認識であれば、「十全」な認識となるであろう。実際、神が人間身体について持っている認識とはそのようなものである。

「しかし神のなかには、このあるいはあの人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念が必然的に与えられている」(5/22/P)。

このテキストに見出される「このあるいはあの人間身体」とは、すでに存在する身体を指示するのではない。これまで存在しなかった身体、つまりまさに存在に決定されるものの身体である。ではなぜそのような身体の認識を「永遠の相のもとに」と表現しなければならないのであろうか。すでに存在しているものを認識する際には以前／以後という時間の概念が適用できるが、これまで存在しなかったものを認識する際にはこの概念は意味をなさない。「永遠は時間によって定義できないし、時間に対して何の関係も持ちえない」(5/23/S)。すなわち時間の概念によつては説明できないものを「永遠」と呼んでいると解釈できるのである。そのような仕方では「神の観念」のなかに「帰結」する観念こそ「人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念」にほかならない。

スピノザはこの観念が「(人間) 精神の本質に属し、必然的に永遠であるようなある思惟の様態」(5/23/S) であるという。このテキストは

重要である。なぜなら、神の思考の一部分である人間精神には、自己の身体をこれまで存在しなかったものとして認識することができるということがこのテキストで肯定されているからである。いうまでもなく、それが「直観知」である。

このように、以上の論理が明らかにしていることは、「感覚経験」と「推論」のみによって認識している人間精神にとつても、それらとはまったく異なる「直観知」という認識が成立しうるという可能性のみである。その可能性が実現するためには、人間精神と神の思考とのあいだにある「天と地ほど」の隔たりが埋められなければならないはずだが、ではどうやってそれを埋めるのかという点はまったく説明されていない。しかし、私の解釈によれば、この点に関する説明を期待することがすでに誤っている。なぜなら、スピノザは説明するかわりに、定理の証明という形で読者に対してそれをダイレクトに示していると思われるからである。最後にこの解釈を述べなければならない。そのために、これまでであえて言及してこなかった「共通概念」に眼を向ける必要がある。

5 共通概念

『エチカ』の用語法で注意しなければならない点は、「変容(affectio)」という用語が二つの異なったレベルで用いられているという点である。

- (1) 「神の属性の変容」すなわち「様態」
- (2) 「身体の変容」

(1) の用法は実体(神)の本質からものが生み出される過程を指している。実体(神)が「変容」することによって「無限に多くのもの」が生成するのである。神自身に「変容」をもたらすのは神の思考である。神の思考とは『知性改善論』の言葉でいえば「未知の事物」を認識することなので、つねに「直観」によって進む。『エチカ』のいう「人間身体の本質」とはこのような認識の対象としての人間身体のことである。

(2) の用法は実体(神)の思考によってすでに生み出されたものが外部から作用を受けることで生じる状態を指している。事物それ自体がすでに実体(神)の「変容」であるから、この場合の「変容」とはいわば「変容」の「変容」であるといつてよい。スピノザが「本質」と區別して「現実存在」と呼ぶのはこの意味での「変容」を被った身体のことである。

さて、重要なのは実体(神)の「変容」としての人間身体と外部からの作用によって「変容」した人間身体は同じものであるという点である。つまり、「本質」と「現実存在」は存在のふたつの次元をあらわしているにすぎない。

「現実存在」の次元とは人間身体がすでに他の事物と相互作用をおこなっている次元である。この次元では人間身体はありのままに認識されることができず、ただ外部からの作用の結果をとおして認識されているにすぎない。外部の対象も自己の身体の状態すなわち「変容」をとおして認識されている。この認識は『エチカ』の用語法では「表象(imaginatio)」である。この用語は『知性改善論』でも同じ意味で使用されている(§84)。「表象」とは対象それ自体の存在に関する認識ではなく、対象が自己の

身体にとつてどのような意味をもっているかを表示するような認識である。したがって、スピノザのいうように、それは「一般概念」(2/40/S1)へと発展する。「一般概念」とは同種の個体間の差異を捨象し、あらゆる個体を同一性のなかに吸収することによって、対象の存在をその意味へ還元して認識させる回路であると考えられるからである。

これに対して、「本質」の次元とは人間身体が存在そのものが認識される次元である。この次元で人間身体を認識するには、他の事物との相互作用のなかにとどまっていることはできない。というのも、この次元においては「身体の変容」を前提せずに人間身体が認識されるからである。

「精神は永遠の相のもとに認識する各々のものを、身体の現在の現実存在を概念することによってではなく、身体の本質を永遠の相のもとに概念することによって認識する」(5/29/P)。

ところが問題はこの先にある。「現実存在」の次元は人間精神によって認識できるが、「本質」の次元はもとと神に固有の認識領域だからである。人間精神がいつきにこの認識領域に踏み込むと主張することはできない。いや、そのように主張することはできるが、それではたんなる神秘主義になってしまうであろう。それゆえ、「現実存在」から「本質」へと接近するための中間的な領域がなければならぬ。では、そのような領域はいつどこに見出されるのであろうか。『エチカ』というテキストそれ自体がまさにそのような領域であると認められる。そこでは個々の人間身体の本質がいかにして存在に決定されているかではなく、

人間身体というものがいかにして存在に決定されるかという認識が与えられる。それが『エチカ』における定理の証明である。

証明は「一般概念」ではなく実体(神)の本質から導き出された「共通概念」(2/40/S1)を使ってなされる。「共通概念」とは「公理」(1/8/S2)のことなのである。「共通概念」と「一般概念」は次の点において明瞭に異なる。すでに述べたように、「一般概念」とは対象それ自体ではなくむしろその意味を表示するものにすぎない。これに対し、「共通概念」とはあらゆる「観念」に含まれる「神の永遠かつ無限の本質」(2/45/P)の概念である。問題はこれがいったい何を意味するかである。

あらゆるものが神の思考によって存在に決定されていると考えるなら、それらすべてのものの観念に共通する「神の永遠かつ無限の本質」とは、いわば神の思考の秩序であろう。その秩序は人間精神に理解できるものであるはずである。というのは、「神の永遠かつ無限の本質」は「すべてのものに共通」(2/46/D)であり、したがって諸事物と人間身体との相互作用から生じる「身体の変容の観念」という「不十全」な観念にも含まれていると考えられるからである。それゆえ、人間精神には現実に「共通概念」が与えられていると考えられるのである。それを抽出したものが『エチカ』の「公理」となっていると考えられる。ちなみに、『エチカ』第一部の公理は7個、第二部の公理は5個、第三部には公理がなく(これは第三部の定理が第二部と連続していることを示している)、第四部の公理は1個、第五部の公理は2個となっている。

スピノザは「共通概念」は「十全」(2/38/P)であるという。というのは、「共通概念」とは神の思考の秩序であるとすれば、神のどんな思考もそれを前提していると考えられるからである。つまり、「共通概念」とは

それがなければものが存在するということが思考できないものであると考えられるのである。この解釈のための例として、『エチカ』第一部公理1を引用してみよう。

「存在するすべてのものは、それ自身のうちに存在するか、または他のもののうちに存在するかである」(1/1/A)。

このように、ものの存在を思考するための最も基本的な秩序が「公理」として掲げられている。『エチカ』の読者にその「公理」が理解できるということは、読者が実際に「共通概念」を持っているということを示している。だからこそ『エチカ』は理解可能なのである。『エチカ』を読むことで、読者はそれまでとは違った仕方でものを認識することになる。すなわち、「感覚経験」にも「一般概念」による「推論」にもよらずに現実存在するものを認識することになる。人間身体がどんなふうにして存在に決定されているかが認識されるからである。『エチカ』の用語法ではこの認識が「理性」(2/40/S2)と呼ばれるのである。重要な点は、「共通概念」によって認識するとき、人間精神が神の思考と同じ秩序によってものを認識しているという点である。こうして、『エチカ』の読者においては、人間精神と神の思考とのあいだに認められる「天と地ほどの隔たりが、そうと説明されないまま埋められていくことになる。ただし、「共通概念」による認識はあくまで人間精神の認識であって神の思考そのものではない。「共通概念」によって認識されるのは人間身体「本質」という個別的な存在ではないからである。

「すべてのものに共通であり、ひとしく部分のなかにも全体のなかにもあるものは、どのような個物の本質をも構成しない」(2/37/P)。

しかし、この延長線上に「直観」があることをテキストが明言している。

「諸事物を第三種の認識〔直観〕によって認識するというコナトウスなしい欲望は、第一種の認識〔表象〕から生じることができないが、第二種の認識〔共通概念〕から生じることができない」(5/28/P)。

この「欲望」はいったい誰に生じるのであろうか。『エチカ』の読者に生じるのである。『エチカ』の証明を理解するあいだ、人間精神は人間身体というものが存在に決定されていくことについての思考に参入する。この思考は「共通概念」によるのだから特定の人間身体が存在については認識できない。しかし、このような「十全」な思考に参入している限りにおいて、人間精神は「身体の変容の観念」の連鎖からなる「不十全」な思考とは異なった次元に置かれることになる。「直観知」へ向かう「欲望」はこの次元に固有の「欲望」である。

ちなみに『知性改善論』の用語法では「知性(intellectus)」(88a)という用語が「表象」に対立する認識を指して使用されている。「知性」には「直観」と「理性」が含まれるはずであるが、『知性改善論』ではその点がじつははっきりしない。「知性」が「直観」を含むことは間違いないのだが、それと同時に「理性」をも含むかどうかという点は曖昧である。「理性」とは推論による認識であるがゆえに「直観」のみを真理とみなす『知性改善論』の真理論のなかではその位置づけが十分にな

されていないのである。この点をはっきりさせたのが『エチカ』である。「身体の変容」の認識それ自体は「表象」である。しかし「身体の変容」がいかんして生じるかについての理解はそうではない。『エチカ』の用語でいえば、『知性改善論』は「身体の変容」の認識と「身体の本質」の認識を区別しただけである。『エチカ』はそのあいだに「身体の本質」は説明できないがにもかかわらず「十全」であるとみなすことのできる認識（「共通概念」による認識）を見出したのである。「共通概念」による推論を「十全」な認識として認めたことによって、『エチカ』の真理論はある意味で譲歩している。実際、アルキエによれば「このような概念を規定するまでスピノザは長く躊躇していた」（Alquié 1981, 193）。しかしこの点で譲歩しなければ、「直観」による認識がどのような条件のもとに成立するのかという点は依然として謎であったであろう。

このように、人間精神が「直観知」に接近する方法は『エチカ』を理解することそれ自体によって与えられると解釈できる。読者はそのような説明をいっさい与えられない。しかし『エチカ』を読むことそれ自体が神の認識領域に身を置くことになっているのである。

おわりに

以上のストーリーを要約してみよう。神の思考は前提から帰結へと進む演繹であるが、演繹のあらゆるステップは「直観」によって構成されている。神によって認識されるのは「これまで存在しなかった」ものである。それらを認識するには「直観」によるほかない。これに対して、

人間精神の思考は「感覚経験」によってすでに存在するものをとらえ、「一般概念」を用いてそれらについて「推論」することである。このように、神の思考と人間精神の思考の間には明らかな断絶がある。伝統的な形而上学においてはこれらの断絶が強調されている。すなわち、人間精神の思考が神の思考に参入するというようなことは考えられないことだったのである。しかし、神の思考こそ真理であるとすれば、人間精神は「感覚経験」や「推論」によってもたらされるものをいわば真理の代用品として受け容れるほかない。スピノザが拒否したのはこのような思想である。したがって、神の思考と人間精神の思考のあいだに認められる隔たりをいかにして埋めることができるかという点が、スピノザの哲学の重要な課題となる。

『知性改善論』においてはこの課題は放置されたままであった。『エチカ』はこの課題にひとつの解決を見出す。それが「共通概念」である。神の思考は規則にしたがう「推論」ではない。しかし、あらゆるものが神の思考によって存在に決定されているのだとすれば、どんなものの観念にも神の思考の秩序が含まれていなければならない。すでに引用した『エチカ』の「公理」をもういちど引用すると、それらの秩序は「存在するすべてのものは、それ自身のうちに存在するか、または他のものうちに存在するかである」（I/V/A）というような、もしかが否定されたら存在についての思考が成立しなくなってしまうようなものとしてとらえることができる。重要な点は、これらがすべてのものに共通であるがゆえに、たんなる「感覚経験」をとおして人間精神に与えられることができるという点である。つまり、神が存在を思考するときの秩序が人間精神にもそっくり与えられている。ちなみに、神の思考の秩序は神

の外にあるのではなく神の本性そのものである。

「神はただ自己の本性の諸法則によって、なにもものにも強制されずに活動する」(117/P)。

神の「本性の諸法則」が作り出す秩序を「公理」として設定し、人間精神および人間身体が存在に決定される論理を組み立てたのが『エチカ』である。いうまでもなく、「定理」の「証明」は「推論」であり、神の思考は「直観」であるから、『エチカ』によってただちに人間精神が神の思考に一致するわけではない。しかし、「直観」によって存在を理解することへの「欲望」がここから発生するのである。このことは、『エチカ』を読むことによって人間精神がすでに神の認識領域に身を置いているということの意味している。

最後に考えておかなければならないことは、スピノザがこんなアイデアをいったどこから思いついたのかという点である。このアイデアの萌芽はすでに『知性改善論』のなかにある。「真の観念」(33)である。ただし、これが「共通概念」そのものであるということはできない。『知性改善論』は人間精神には「真の観念」があるということを認めることから出発している。『知性改善論』が説く哲学の方法は「真の観念がかなるものであるかを理解」(83)することを不可欠の手続きとして含む。したがって事物ではなく「観念」が考察の対象である。「方法とは反省的認知ないし観念の観念以外の何ものでもない」(88)。では、「真の観念」とは具体的にどういったものなのか。スピノザは幾何学から例を出す。「半円が中心の周りを回転する」(872)ことによって「球の概念」

(872) がえられるというものである。この例の特徴は、この場合の「球の概念」がまったく「感覚経験」にも「一般概念」にも依存しておらず、ただ知的な操作によって認識されているという点である。しかし、まさにこの点において「真の観念」は「共通概念」と異なる。

「球の概念」はスピノザ自身がどのように「その対象がわれわれの思惟能力に依存しており、自然のなかに何らかの対象を持たないことをわれわれがきわめて確実に知っているところの、ある真の観念」(872)である。これに対し、「共通概念」とはあらゆるものを存在に決定する神の思考の秩序であり、したがってその秩序によって思考されるのは実在的なものである。

では、「真の観念」から「共通概念」への展開はどのようにして起こったのであろうか。この点は推測してみるしかない。——『知性改善論』の時点で人間精神のなかに「真の観念」があるという点にスピノザはすでに気づいていた。しかし、『知性改善論』は「感覚経験」と「知性」を峻別するという合理主義の精神にあまりに忠実であった。そのため「真の観念」が「感覚経験」をとおして暗黙²⁾に与えられているという点まで掘り下げて認識することができなかった。この意味において「真の観念」の内容はあまりに表面的であるといわざるをえない。「真の観念」とは「共通概念の抽象的観念」(Deleuze 1981, 156)である。ドゥルーズがいうのはこのことである。しかし、スピノザはここで挫折しなかった。「感覚経験」のなかに暗黙に含まれているものこそ実在を思考するために不可欠のものであるという点を見極め、「真の観念」を「公理」として設定することによって『エチカ』を構想したのである。

凡例

『知性改善論』(Tractatus de Intellectus Emendatione) の参照箇所は節番号を本文中に挿入する。

『エチカ』(Ethica) の参照箇所は以下の略号を用いて本文中に挿入する。

公理→A 定理→P 証明→D 系→C 注解→S 【例】『エチカ』第一部
定理25→I/25/P

使用テキストGebhardt(ed) 1972, Spinoza Opera II, Heidelberg

注

(1) 「真理が「一致」によって規定されるとしても、前もって与えられている対象の把握がこの一致であるとは考えられない。」「スピノザの直観は思考の創造的な力に全面的に結びつけられている」(Brunschvicg 1951: 81)。

(2) この結果『知性改善論』における「真の観念」は非常に「曖昧な概念になっている。『知性改善論』において真理と認定されるのは「直観知」だけである。それなら「真の観念」とは「直観」によるものなのであろうか。少なくともそのような説明はまったく与えられていない。ではなぜそれが「真」であるといえるのか。この疑問にスピノザは答えていない。

文献

- ・Alquié, Ferdinand 1981, *Le Rationalisme de Spinoza*, PUF
- ・Brunschvicg, Léon 1993, *Les Étres de la Philosophie Mathématique*, Blanchard
- ・Brunschvicg, Léon 1951, *Écrits Philosophiques tome I*, PUF
- ・Deleuze, Gilles 1981, *Spinoza philosophie pratique*, Minuit
- ・Descartes 1996a, *Meditationes de Prima Philosophia*, Adam & Tannery(eds.), *Œuvres VII*, Vrin

- ・Descartes 1996b, *Regulæ ad directionem ingni*, Adam & Tannery(eds.), *Œuvres X*, Vrin

- ・Euclid 1956, Heath(ed.), *The Thirteen Books of Euclid's Elements VOL. I*, Dover

- ・Kant 1990, *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner

- ・Locke 1975, Niddich(ed.), *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford

- ・Marion, Jean-Luc 1994, "Aporias and the Origins of Spinoza's Theory of Adequate Ideas," *Spinoza on Knowledge and Human Mind*, Brill

- ・Meinsma, K.O. 1983, Roosenburg(trad.), *Spinoza et son Cercle*, Vrin

- ・Sanchez Estop, Juan Domingo 1987, "Spinoza, Lecteur des Regulæ," *Revue des Sciences Philosophiques et Théologiques*